

目的 各家庭で衣料を自給自足していた時代には、女達は日常の暮らしの中に美を求めて、縞柄を考えて機を織り、手染めをし、また紺屋に型染めを依頼した。東北地方で使われていた染型紙には、伊勢型、会津型等の他に、その地方で彫られたいわゆる「国産」のものがある。「地方の時代」であり、地方の見直しが言われている現在、その地方で使われていた染型紙を通して、地域の衣生活の実態を探り、先人のこころに触れるのも意義のある事と思う。今回は、宮城県北部、米山町の新田家に残されていた染型紙中の仙台産型紙を調査し、上記について考察しようとした。

方法 東北歴史資料館収蔵の新田家の染型紙、2102枚中、仙台産であることが商印で判明している型紙、44種、1/2枚を主資料として分析し、他地方産の型紙及び関係文献を参考にして考察した。

結果及び考察 ①仙台産の型紙44種を文様により分類すると、小紋1、小紋中形4、中形36で、縞柄、緋柄はない。②中形は3枚型が最も多く、5枚型もあった。組数の多い型の追掛け型には、紺屋が自製した消型もあった。③文様は多種にわたり、竹に鯉等のユニークな柄や、複雑な柄も多く、彫りの技術も高い。

以上の事から仙台における型紙作成の技術は、糸入れをして縞柄を作る迄は出来なくとも、かなりの程度に達していたと考えられる。これらの型紙が仙台で作られ、さらに県北の農村地帯で手の込んだ型染の需要が相当数あった事を知り、当時の仙台藩の生活文化の一端を窺う事が出来た。